

西洋経済史B(坂出)

第 12 講 ま と め (1) 040709

第1講 西洋経済史学の課題と対象

一昨年の講義一「パクスブリタニカからパクスアメリカナへ」現代欧米経済史
本年一それぞれどのような内部構造をもっていたのか、基軸産業の展開を中心に解説(AB)

「最初の工業国家」イギリスにおいて、前近代社会とは区別される資本主義的生産様式が、
なぜ(Why)、いつ(When)、だれが(Who)、どこで(Where)、どのようにして(How)、生み出
されたのか?そしてそれは何か(What)?19世紀末から20世紀初頭にかけて成立したパク
スブリタニカの成立史⇒「最初の資本主義的帝国主義国」

Population「人口」ThomasRobertMalthus, 1766・1834」

『初版人口の原理』(1798年)an essayonthePrincipalofPopulation

1789年フランス革命

・救貧法の廃止一救貧法により貧民に貨幣を与えると生産量」定の食料品の価格が上昇
し、より多くの労働者の生活状態が悪化する。

・自由貿易に反対一安い外国穀物が輸入されることにより、劣等な土地の耕作が放棄され、
地主の手に入る地代が減少する。(←⇒スミス・リカード)

→地主階級を勢力基盤とするトーリー政権の支持

政策的焦点は、**救貧法と穀物法**

数量的把握にとどまらず、経済生活を営む「生きて活動する」住民の総体の再生産を念頭
に置いた経済分析・歴史分析をこころがけたい

population 具体的な表象、そのままでは混沌に過ぎない、を分析・理解するツールとして
経済史の用語(範疇、カテゴリー)を歴史的展開に沿って、順次説明していきたい。

農業→繊維工業→重工業→サーヴィス業

市民革命

産業革命

農業革命/金融革命/(財政革命)

イギリス中世社会における地主(土地所有者)と農民の関係からどのように資本主義的生

産関係が生まれてくるか？

第2部 イギリス産業資本主義確立過程

農業：開放耕地制度→第一次囲い込みへ

工業：農村工業 →

都市ギルド工業 →マニファクチュア

毛織物・綿工業/石炭・製鉄業/鉄道業・造船業の地域・産業連関的発展プロセスの検討

第2講 農業革命

【1】開放耕地制度

[1]三圃農法と開放耕地制度

・領主・農奴関係

・封建地代の三形態：①労働地代②生産物地代③貨幣地代

14・15世紀のイングランド①②→③へ

{2}封建的危機と農民一揆

●封建的危機

①中世期における貨幣悪鑄に求める「貨幣危機」説

②危機の原因を、黒死病とそれに起因する人口の減少に求める説

③14世紀を「沈滞」期と規定する説

ポスタン：②③

賦役地代の金納化(コンミュテーション)：領主のための労働と自己の保有地のための労働が場所的にも時間的にも区別→隷農の全時間を、自分自身の保有地の耕作にあてることができるようになった。：ただし、領主は地代金額を一方向的に引き上げることも可能だった。→領主に有利な貨幣地代を、農民に有利な貨幣地代に転化するためには、長期にわたる農民の不断の闘争が必要であった。

1358年ジャックリーの乱(フランス)

1381年ワット・タイラーの乱(イギリス)→「地代の金納化」

1524年農民戦争(ドイツ)

危機打開の方向性

ドイツー「再版農奴制」(農場領主制)

フランスー寄生地主制

イギリスー封建領主の近代的地主への転化

【2】第一次囲い込み(15世紀後半～17世紀前半)

[1]農民的囲い込み

[2]領主的囲い込み:牧羊需要の増加

第4講 毛織物工業とマニュファクチュア

2004年5月7

日

テーマ「資本主義の起点は都市か農村か?」

1 大塚久雄のマニュファクチュア論

(1) マニュファクチュアと問屋制の絡み合いの二つの型

第一形態:「農村の織元」(中産的生産者層またはヨーマン層の産業経営)を中心とした問屋制度

・問屋としての商業資本が、農村マニュファクチュアの利害に服している。

第二形態:「都市の織元」(問屋制商業資本)を中心とした商業資本による産業資本の支配

(2) 第一形態×第二形態:マニュファクチュアの歴史的意義

2 堀江英一のマニュファクチュア論

(1) 堀江の大塚批判

(2) 織元(clothier)の3分類(『入門』92頁)

①「貧乏な織元」独立自営の小営業者

②「中産の織元」:「マニュファクチュア」

③「富裕な織元」羊毛を生産地から買い入れて①②に糸市を通じまた掛けで売る羊毛商人、毛織市場を通じまた直接にそれをロンドンに売る毛織物商:マニュファクチュア段階の毛織業の頂点

(3) 羊毛生産者→織元①②③→一毛織物市場の関係はとなっているか?

3 サフォークにおける農村織物都市の成立と展開

(2) イギリス農村工業の発展

(3) サフォーク(東部)農村織物都市の成立

(4) 織元の性格

牧羊業者→ 「富裕な織元」 →ロンドン市場

「中産の織元」

この関係はとなっているのか?→「ジェントリ」(郷紳:爵位(男爵以上)をもたない地

主)階層の分析

第5講 ジェントルマン資本主義論

2004年5月14日

1 トーニー×トレヴァー・ローパー論争

(1) 「ジェントルマン」とは誰か?

(2) 「ジェントルマンの勃興」

16世紀(市民革命に先立つ1世紀):ジェントリの勃興期

・社会構成体の上層部が崩壊しつつ同時に再構成されていく構造的な変化の進行

貴族(名門旧家):領主経営悪化と奢侈により財政悪化

国王:王領地の減少

ヨーマン:16世紀末に長期借地契約の終了とともに没落

→農民・貴族・教会(宗教改革後の修道院領再配分)・国王の手からすべりおりてくる所領をジェントリが手中に

貴族の没落とジェントリの勃興←(反映)←土地経営方式の差

→絶対王政を頂点とする封建的土地所有体系・法が「農業の資本主義化」の限界に転化する→イギリス革命

(3) トレヴァー・ローパーのトーニー批判

トレヴァー・ローパー:土地経営方式(トーニー)ではなく、商業・金融・とくに官職保有こそが、没落か勃興かを決定

→「貴族×ジェントリ」(トーニー)よりも「農村ジェントリ X 宮廷ジェントリ」の対立が重要

イギリス革命

トーニー:没落貴族×勃興ジェントリ・商業ブルジョアの対抗

2 イギリス革命における土地問題

(1) イギリス革命は「上から」か「下から」か?

● 「下から」の道

経済過程:封建的土地所有の解体→自由な独立自営農民層の形成

イギリス革命:経済過程に照応して、独立自営農民層を基軸として進行

(2) イギリス革命における二つの綱領

国王一領主一農民の重層的土地所有諸関係:開放耕地制度

・ジェントリを中心とした領主的土地所有の方向性

・農民の玲農的零細土地保有の方向性

①汎議会派(長老派・独立派)の綱領:**地主的綱領**

- ②水平派綱領:農民的綱領
- ③水平派の蜂起の敗北→独立派勝利

第8講 マーチャント・パンカーの台頭

【1】イギリス革命と商人・金融利害

- 1 イギリス革命における長老派
- 2 土地利害と金融利害の融合
- 3 アムステルダムからロンドンへの金副中心地の移助

第6講 綿工業と機械制大工業

1 綿工業における産業革命

- (1)「世界の工場」
- (2)インド貿易と綿布に対する需要増大
- (3)家内工業制度 The domestic system

2 綿工業における発明の連鎖

- ①ケイ
- ②ワイアットとポール
- ③ハーグリーブスのジェニー紡績機(1765年)
- ④アークライト
- ⑤クロンプトンのミュール紡績機

→家内工場の残滓をジェニー機とともに一掃

3 機械制大工業成立の諸結果

- (1)問屋制の終焉
- (2)労働者問題
- (3)ラダイト運動(機械打ち壊し)
- (4)過剰生産恐慌

第3講 産業革命

【1】「産業革命」論の系譜

・産業革命の開始期

[1] 古典的解釈(断続説)

[2] 修正論的解釈(連続説)

●産業革命が労働者階級の生活水準の低下をまねいたかどうか?論争

[3] New Economic History(漸進説)

...

→「地域的アプローチ(regional approach)」

①地域的なデータは信頼性が高いものが多い

②鉄道時代(1825年以降)以前は製品・生産要素市場のための国内市場は全国的には統合されていなかった。

③地域的な差異

【2】産業革命「以前」と「以後」～大塚『欧州経済史』を中心に

[1] 産業革命の推進した近代的産業資本家がどのような階層から出現したか?

・日本の資本主義発達史をめぐる論争から出発

日本の近代的工業を推進した三井・住友は維新以前に商業資本として地位を築いていた。

①商業資本の産業資本への転化説(社会的系譜における連続説)

②別な資本家の出現(社会的系譜における断絶説)

[2] 近代に独自の生産様式としての「資本主義」

【3】分析視角一「産業」と「地域」

[1] なぜイギリスが「最初の工業国家」になったのか?

[2] なぜランカシャーが「最初の工業地域」になったのか?

【イギリス革命】

第2講 農業革命

【3】第二次囲い込みと農業革命

[1] 「農業革命」1750・1850

①開放耕地の囲い込み

②新農業技術・機械の適用

ノーフォーク農法' The Norfolk Four Course'

[2] 第二次囲い込み(「議会囲い込み(Parliamentary Enclosure)」)

[3] 第二次囲い込みの社会経済的影響

三分制度(近代的地主・農業資本家・農業労働者：三つの基本階級)の成立—近代的土地所有

◎三分制度の確立

>近代的地主→地代

>農業資本家→利潤

>農業労働者→労賃

第8講 マーチャント・パンカーの台頭

【2】マーチャント・パンカーの概念と槓能

1 マーチャント(merchant)業務

2 手形引受業務(acceptance business)

●有カマーチャントの手形引受業務への特化

3 発行業務(issue business)

【3】有力なマーチャント・パンカーと国家財政

1 ペアリング商会

2 回スチャイルド商会

3 マーチャント・パンカーと政府

3 ケイン・ホブキンスのジェントルマン資本主義論

(1)ケイン・ホブキンスのジェントルマン資本主義論

1970年代以降:「ジェントルマン資本主義」論—イギリス経済史・帝国史の中心テーマ
製造業者の利害:経済および外交政策の形成に対して、今まで考えられていたほどは大きな影響力をもたなかった。

1688年名誉革命「地主利害を田園の塹壕内に隠し、政治体制に対する彼らの要塞をより堅固にした」→**ジェントルマン秩序の形成**(シティの指導的な金融業者や商人はジェントルマンの身分を与えられていた):権力が低下しつつある地主階級の要求と、拡大しつつあるサービス部門の妥協;地主階級の財産と、革命を財政的に支えた**マーチャント・バンカー**の財産の結合

1688年(名誉革命)~1850年:「ジェントルマン資本主義」の確立「改革的地主とそのジュニア・パートナーである改革的金融業者によって率いられた資本主義の一形態」

19世紀中葉~:イギリスの経済成長のエンジン:サービス部門(第一次産業・第二次産業に属さないすべての活動の総計)→シティを中核とするイングランド南東部

国内)自由貿易・金本位制・均衡財政→最終的な受益者:ロンドンのシティとサービス部門の関係者たち(世界の工場としてのイギリスの立場よりも国際的サービス・一センタ

一としての地位を優先※自由貿易(1846年穀物法廃止)1 ロンドンを食料と原料の世界取引の巨大中心地にかえ、海運、海上保険、商品取引所が急成長しシティに大きな利益をもたらした)

国際)大英帝国の拡張:ジェントルマン秩序の輸出

(2)利害分析

図)ジェントルマン秩序における諸経済グループ

	収入形態	サブグループ	社会階層	地域
土地利害	地代	非改革地主 改革地主	ジェントルマン的結合	
資本利害	利潤:利子 産業利潤	金融資本家 製造業資本家 農業資本家	ジェントルマン的結合 ×	南東部 北部(地方)
労働利害	労賃	農業労働者 製造業労働者		

・製造業資本家(コブテン主義 Cobdenite):労働者階級からの圧力に対処するためジェントルマン資本主義との妥協

16世紀の「ジェントリの勃興」→ピューリタン革命(1649:「ブルジョア的土地変革」と名譽革命(1688:「ジェントルマン秩序」確立)を通じて形成された「ジェントルマン資本主義」(地主と金融資本家の同盟)→大英帝国の膨張